



森林と人を 生かす知恵 162

木材の「なまえ」問題

岐阜県立森林文化アカデミー 講師 ● 石原 亘

学生の頃、友人に香港からの留学生がいたのですが、彼は自身の名前に英語の通称名(例・スズミ)を日常的に用いていて、私も彼のことを通称名で呼んでいました(おかげで本名が思い出せない・・)。こうしたことは、香港やシンガポールなど英語圏との接触が長い華僑圏では一般的なことだそうですが、半ば公然とEnglish nameがあることをちょっぴり羨ましく思ったものです。

さて、ご存じの方も多いかもしれませんが、木材には、このように複数の「なまえ」を有することが多々あります。木材図鑑には一般的に「和名」と「学名」が記載されていますが、地域的な背景から和名そのものが複数存在する場合もあるほか、実務上では「流通名(市場名)」で呼ばれることも多く、しばしば木材流通や建築の現場で混乱を招いています。

例えば、淡い赤褐色〜黄褐色の広葉樹材は、生物学的な分類を脇に置いて、「○○サクラ」と呼ばれて流通することがあります。カバノキ科カバノキ属のウダイカンバ(マカバ)、ミズメ

(アズサ)は、それぞれカバザクラ、ミズメザクラと呼ばれて流通していることがあります。時には「○○」の部分略されて、単に「サクラ材」として流通している場合もあり、バラ科サクラ属のシウリザクラやヤマザクラなどと混同されることがあります。また、南洋材でも、ウダイカンバに似ているニヤト(Nyatoh、アカテツ科の複数の樹種の総称)を「南洋ザクラ」などと呼ぶことがあります。

輸入材については、ほとんどが流通名で取引されていると言ってよいでしょう。ホームセンターなどで見かけるWW(ホワイトウッド)やRW(レッドウッド)といった表記はその代表例です。前者はヨーロッパトウヒ(マツ科トウヒ属)、後者はヨーロッパアカマツ(マツ科マツ属)を指す日本国内向けの流通名です。なお、北米産のセコイア(ヒノキ科セコイア属)についても「レッドウッド」と呼ばれることがあり、全く異なる樹種でありながら、紛らわしいことに同じ流通名が使われています。

また、色味や物性が近い樹種を、ま

とめて一つの名称で流通させる例も多くみられます。先に例示したニヤトも複数の属にまたがる樹種の総称ですし、かつて合板の代名詞だったラワン(フタバガキ科パラシヨレア属などの複数樹種の総称)も同様です。このほか、北米産のツバイフォー構法用製材においては、SPFといった樹種表記がされます。これは、北米産のスプルース(マツ科トウヒ属)、パイン(マツ科マツ属)、ファー(マツ科モミ属)の頭文字をとった呼称で、これらは強度特性等が比較的似ているため、SPFとして区別なく流通させています。

もっとも、標準的な和名であつても、生物種の分類における「属」に配慮していない例は多々あります。

昨年、中国の国有林に行った際、人工林と思わしき一画で、植えられている木の樹種を現地の方に尋ねたところ、「Pine(＝英語で一般に「マツ」を指す)」との返答がありました。ただ、後から調べてみると、彼が指していたのは中国の主要な人工林樹種であるコウヨウザン(ヒノキ科コウヨウザン属、写真1)であり、生物学的には



写真1 中国の人工林でよく見かける
コウヨウザンの葉

マツ属とは縁遠いものでした。日本でも、針葉樹のことを「マツ」とか「マツ系」などと慣例的に言う人がいますが、これと似たようなニュアンスなのかもしれません。実際、和名で○○マツと呼ばれているものでも、エゾマツはトウヒ属、トドマツはモミ属、ベイマツ(北米産)はトガサワラ属で、いずれもマツ属ではありません。なお、ベイマツについては現地名もDouglas Fir(ファー＝モミ属)なので、和名・英名ともに分類学的には妥当ではありません。

ここまで述べてきたように、木材の「なまえ」は非常にややこしく、また、学名以外には厳密なルールがあるわけではありません。ただ、あまりに自由すぎる名前付けのせいで、樹種の違いが分かりにくくなっている場面もあります。学術的な立場から言えば、もし新たに流通名を付けるのであれば、せめて「属」くらいは配慮してほしいな、とは思っています。